

## 軍隊生活からシベリア抑留の回顧

島根県 都田 実

昭和二十年三月中旬夜中に非常呼集がかかり、全員完全武装して、行軍開始した。そのときの命令は、某地向け転進せよとのことであった。

ぬかるみの行軍、後満州入り

行軍して二日目ころから、雨が降り始めた。毎日毎日雨の中の行軍であった。支那の土地は、やわらかい粘土質で、壁泥のようになり、だんだんと歩くことが困難になってきた。一日に一キロか二キロぐらいしか歩けない。この状態で何日か行軍が続いた。四十センチぐらい足が入り込み、今度足を引き抜くのに大変力が要った。みなの疲れがひどくなった。これでは戦力が鈍るので、一時休養の命令が出た。二日ほど支那の家で、身辺整理（衣類洗濯）をして、疲れをいやした。雨もやんで、行軍開始して一日ほどして私は頭が痛くなり、軍医に診断

してもらったら、假痘（症状の軽い種痘）伝染病もあるので、近くの病院に入院した。病院で、衛生兵の案内してくれた部屋にし、同じ隊の安永上等兵が私と同じ症状で入院していたので、話相手ができて、一か月の入院も退屈せず過ごせた。退院してから私たち二人は、本隊から離れたので、命令により荷物輸送の列車の監視兵として列車に乗った。列車は満州に向かっていった。列車に乗って半月ほどして、楊木林で連隊本部に合流、通信中隊の指揮下に入った。

部隊は戦車隊の兵舎に入った。昭和二十年八月上旬であった。我々通信隊は、第一、第二、第三大隊に二日ばかりで有線を構成した。私は、延線手として、第二大隊の線を張った。八月十四日終戦の前の日のことであった。連隊本部から直ちに線を撤収せよとの命令が出た。なぜだろうとすぐ線を巻いて連隊本部に帰った。

終戦武装解除、労働大隊編成、ソ連入り

翌日八月十五日終戦となった。天皇陛下のラジオ放送はよくわからなかった。だれ言うともなく戦争に負けて、無条件降伏したのだとみなは呆然として二、三日過

ごした。そして武装解除が始まり、いよいよ本当と思っ  
た。私たち部隊は、楊木林の兵舎から出され、山に入り  
幕舎生活に入るようになった。一週間ほどして、ソ連側  
は労働大隊を編成していた。私らの中隊は、三つに分け  
られた。八月下旬と思う、四平街から黒河まで列車に乗  
せられ、黒河の対岸ブラゴエシチエンスクへ行き、ここ  
で一週間ほどしてから列車に乗った。次から次へと列車  
が出て行く。私らの乗った列車は、シベリア原野を西へ  
西へと、九月中旬ごろと思う。いやな予感がした。遠い  
所へ連れてゆかれる。もう帰れないかもしれない。

二昼夜ほど走って、右側にバイカル湖が見えた。それ  
からしばらく走って大きな駅についた。多くのロシア婦  
人がパンや食物を入れたかごを持って列車に向けて集  
まって来た。食物パンと時計、万年筆、衣類、石けん等  
を交換してくれと、前々の列車もみな列車の少ない給食  
で、腹が減るので、自分の所持している衣類、石けん、  
時計、万年筆とパンを交換したものと思う。

前の多くの列車の都合で、停車時間が長いときもあ  
り、短いときもあり、いつ発車するかわからないので、

そのため大便は列車の近くの線路の中ですので、足の  
踏み入れる場所もないほど、そこらじゅう糞だらけだ。  
情けない状況と思った。また設備のない有蓋車で、雑魚  
寝でシラミの発生に悩まされた。昼間はシラミ取りせね  
ば、ムズムズかゆくて気持ちが悪い、シラミ取りが一日  
の日課だ。

出発してから十五日ごろ、石炭を満載した列車にすれ  
違った。これはどこか近くの炭鉱から積み出していると  
思った。やがてベトロパフロフスクという大きな駅に着  
いた。一日くらい停車して、ここから南下して、二昼夜  
ほどしてカラカンダ駅に着いた。ここは石炭の出る町  
で、広範囲にわたり多くのボタ山が見えた。一つのボタ  
山が一つの炭鉱である。

#### カラカンダ第八収容所入り

カラカンダ駅から徒歩で三十分後に、第八収容所につ  
いた。周囲は、鉄条網が張られ四隅には見張台の櫓が  
あった。中には建物五棟建っていた。門前に二時間くら  
い待機して、収容所の一棟に入った。そして身体検査、  
居住区注意、作業配置等。この収容所は三つの炭鉱を受

け持っていた。収容人員は約五千人くらい、ゲルマニア（ドイツ）、チェコスロバキア、日本人は千人くらいだったと思う。炭鉱は、露天掘り、立坑、斜坑とに分かれ、カラカンダは斜坑で、層は三〜四メートル地下に向けて無限に入り込んでいる。

炭鉱の作業は、クッ進（穴掘り）、仕繰り（鳥居形支柱立て）、移転方（コンベアの取付移動）、採炭夫（コンベアへ石炭を入れる）、ワゴン車係（貨車）、カッター（層の下部の石炭をカッター機械でさらえる）、ブリンスキ（穴あけ係）、ハッパ係（穴をあけダイナマイトをつめる）、電気係（スイッチ配線等）、充填、選炭に分かれている。

## 入坑

いよいよ入坑となり、収容所から炭鉱の控え小屋まで警戒兵が両側に隊伍を組んで歩いて約二キロ、控え小屋でランプをもらい、斜面の坑道へ降りて行く。上には大きな送風機が空気を坑内に送りこんでいる。その音と風とがスーと、まるで地獄の底へ降りてゆく感じである。この中央坑道は、石炭捲き上げ、捲き下げのレールが複

線になっており、レールの上部には太いワイヤが上下している。歩道は線路わきにあり、出入坑者はそこを通る。斜面を降りてゆくと、百メートルごとに横坑道が左右に分かれており、さらに一番二番三番と、私たちは十二番坑道であった。それから右側へ三百メートルほど横坑道を歩く。この周りは全部石炭が掘りつくされている。この横坑道は、石炭を貨車で運び出すため、複線のレールと電車の架空線が張られている。採掘現場から貨車十車両単位で中央坑道まで運ばれ、それから上に捲き上げられるわけである。

作業現場に到着して、私たちの作業はブチキ（充填）で石炭の掘ったあと、鳥居形の支柱（丸太の木）をする。これは一時的の処置で、天井が下がるので、永久的に天井を支えるために、所定の場所間隔に、天井をばらした石を材料とし、前からつくられてきた支柱、長さ五〜七メートルぐらいの石の柱を継ぎ足してゆくわけである。この作業は、ハッパをかけた石を落とした下の作業で、ときどき石が落下するので、大変危険で一時も油断ができない。天井の石のギザギサは、下の私たちを威

嚇しているようである。この危険な作業は、緊張の連続で体がクタクタに疲れる。

一般の作業は、前記のように分かれ、一組（八時〜十六時）、二組（十六時〜二十四時）、三組（二十四時〜八時）となっており、時間が決まっている。ブチキ（充填）作業は、作業終了せねば出坑出来ない特殊作業である。最初作業になれぬため、十時間〜十五時間もかかって、やっと終了、クタクタに疲れた体でスコップを肩に担いで、現場横坑道から斜面の中央坑道を上にあがり、暗黒の世界から地上に出る。真っ黒になった顔に太陽の光が当たる。太陽のありがたさが身にしみる。今後入坑までの命は大丈夫と自分に言い聞かせる。控え小屋でみながそろると、収容所向け歩く。疲れた体にむちうちながら、凍りついた道で転ぶ者もいる。隊伍を乱すので警戒兵がわからぬ言葉で怒っている。顔がチカチカする。零下四十度くらいかなと思った。

やがて収容所に到着。入浴場に入る。四角の小さい手桶一杯のぬるま湯で、最初は真っ黒になった手、顔を洗い、タオルで体をふき、真っ黒に汚れた残りのぬるま湯

で作業服の汚れを洗う。この地区は、水が乏しいのだ。しみじみ水のありがたさがわかる。やがて食堂に行く。

長時間入坑していたので、二食一ぺんに食べることにになり、腹が変な具合である。食事が終わり自分の居住区の部屋に入り、とにかく眠たい。疲れがひどいので、すぐ寝入ってしまう。次の召集が来るまで寝入ってしまうわけである。入坑のときは、今日の命は大丈夫か、作業終了して出坑すれば、次の入坑までの命は大丈夫と、以上の繰り返し毎日であった。つまり生と死の境地であった。

#### 第一の事故、落盤

炭鉱は、この世の地獄である。地上の無限の重圧でいつ落盤するかわからない。またメタンガスの爆発も起きる。そして多くの犠牲者が出る。この炭鉱ではソ連人の五〜十年の重い懲役人が多人数入坑していた。

六か月ほどたつて、一応作業になったある日のこと、現場で所定の場所にスコップで石をつめていたとき、突然天井からバラバラと小さな石が降って来た。これは大きな落盤の前兆で、作業中の五人の者が慌てて安全の場

所に避難した。やがてすさまじい音がして、私の頭上から大きな石が落下してきた。私は、慌ててそばにあった材木の陰に身を伏せたので、材木のため、私の身体がベシヤンコにならず助かった次第である。そのとき、あまりの出来事で、私は気絶した状態がしばらく続いた。やがて大丈夫かと、戦友の大きな声で意識を取り戻した。不思議にもかすり傷一つも受けていなかった。

## 第二の事故、感電

一年ほどたったころと思う。作業終了して、現場から横坑道の線路の上をスコップを肩に担いで歩いていたところ、電車の架空線が部分的にたれ下がっていたことに疲れていたのがつかず、スコップが架空線に接触して感電した。そのときは、目から口から耳からパーッと火花が出たと同時に、身体全体がリンと硬直した。そして意識を失った。そして前かがみのまま線路の中央の水たまりに顔をつっこんでいた。前かがみで歩いていたため、感電と同時に前に倒れたので、感電の時間がわずかで、黒こげにならず助かったと思う。意識不明のまま線路の水たまりにうつむけになっていたので、どれくらい

時間がたったかはわからない。口が冷たい感じがして少し意識が戻ってきた。ここは何処だろう、私は何をしていたのか思い出せなかった。

やがて右耳下がチカチカと痛み出した。そして意識が戻ってきた。私は、ここでスコップの先が架空線に触れ、柄が耳たぶにあたっていたので、そこから身体に電気が入ったのだと、ぼんやり坐りこんでいる。地上控え小屋では、点呼をとって私がおらぬので、大騒ぎでみなが心配して迎えに来てくれた。このときも命拾いをした。

## 第三の事故、急性肺炎になる

入抗して二年目、毎日毎日過労の連続。食事は悪い、少ない。パン一日三百グラム、粟か米がゆ、飯盒のふた一杯、砂糖大さじ一杯、スープ、トマトが少し入った塩汁、これでは体力が保てない。そして酷寒零下四十度、五十度、最低零下五十七度にも下がった日もあった。

このような状況で、私は疲労の連続、そして感冒を無理して作業したため、急性肺炎となった。そして入院した。肺炎患者が十人ばかり入院していた。意識不明の日

が八日続いた。私は、シベリアの土になるのではない  
か、いや、こんな所で死んではならない、頭の中かすか  
にこんなことを思った。今日死ぬか、明日死ぬか、私が  
一番重態で死骸を片づけやすいように一番端に寝かされ  
ていた。九日目から絶望視された容態が、意識も少しず  
つ戻ってきた。設備もない、薬もない、治療法といつて  
も平常より少しよいものを食べさせるくらいである。こ  
の最悪の状況でよくも助かったものと思う。

以上、抑留中の事故三回とも奇蹟的に助かったこと  
は、御神仏の御加護があったからだと思う。多くの戦友  
が栄養失調から、寒さ、過労と悪条件ばかりで、肺炎で  
死ぬものが多かった。私は、以上の状況の中、入院二カ  
月ほどして退院したが、極度の身体の衰弱により心臓を  
悪くして、地上作業一か月ほどして、帰国のメンバーに  
入った。いざ帰国となると、喜びの反面、まだ炭鉱で働  
いている戦友を思うとき、すまないと後髪をひかれる思  
いであった。列車の中でもみな喜んだ顔をしているもの  
がいなかった。帰ってどうするか、日本はどうなってい  
るか、家族はどうか、仕事があるのか、各人各人がそれ

ぞれ不安を募らせたことと思う。また本当に帰れるの  
か、ナホトカまで行って、船が来ないのでまた別の収容  
所に送られ、帰国できなかった人もあると聞いている。  
とにかく不安の連続であった。やがて列車は、ナホトカ  
に着いた。船待ちのため、丘の上にある収容所で船を待  
つことになった。

#### 遠州丸に乗船、帰国

一週間して船が入港接岸した。遠州丸という五千トン  
ぐらいの船であった。しばらくしていよいよ乗船という  
ことで前列からタラップを上がりかけている。私もタ  
ラップに足をかけた。これでやっと帰れるのだとの実感  
がした。みな顔は不安から安心した顔になっていた。  
やがてナホトカを後に、ゆっくり船は日本に向け動き出  
した。私どもの居住区は深い船底であった。梯子での上  
下は大変であった。

二日目の朝、日本がかすかに見えてきた。だれかが  
言った。おい、内地が見えたぞ。皆は船底より甲板に  
駆け上がった。だんだんと内地の山々が近づいてくる。  
私は知らぬ間に涙がこみあげて来た。このときの感激は

忘れない。長年夢に見た日本だ。だれもの顔が涙でくしゃくしゃになっていた。よかったな、よかったなと手をとりあって喜んだ。

船は舞鶴港に入港、そして帰国した次第である。

あとがき

私は九死に一生を得て帰還したが、多くの犠牲になられた戦友を思うとき、生存者の我々は胸が痛み、悲しみに耐えません。シベリアで亡くなられた英霊に対して、心の底から御冥福をお祈りします。

## つらかった捕虜生活

——異国の丘の体験記——

栃木県 八木澤 旺 二

私は、昭和二十年七月二日、北支派遣軍独歩52から、伍長の階級章をつけて、石頭予備士官学校の第十三期生として入校した。そして八月に軍曹に昇級した。毎日対戦車、肉迫攻撃、挺身切り込み隊の訓練が重点であっ

た。

八月九日未明、ソ連軍が国境を越え満州に侵入との報に、石頭予備士官学校三千六百人の幹部候補生は二軍に分かれ、小松茂久万大佐の率いる一隊は東京城へ、荒木護夫少佐の率いる一隊は掖河、愛河方面へと出動した。

八月十二日、私は荒木連隊の連隊砲手として掖河に着、敵戦車の進撃を防止し、攔坐させるために、砲陣地を掖河の高台に構築完了させた。

我が勇猛果敢な候補生の戦闘むなく、近代적裝備を持ったソ連軍には勝てずに、多数の犠牲者を出しながら、横道河子まで後退し、八月二十一日（火）午前中、十五日の終戦命令も知らされずに武装解除になった。

大きな倉庫に、私たち三十人位の連隊砲隊員は強制的にソ連兵の警備付で引率されて行った。これが仮収容所となったのである。次から次へと無裝備になり、屠殺場に運ばれる牛馬のように、魂を失った日本兵が下うつむき加減でぞろぞろと仮収容所の中に入ってきた。二、三日で千人近い将兵が収容されたという。

私は戦闘中の服装そのままであり、軍服も破れ、軍靴